

トカラ列島の話 その5

1974年の夏は、宝島での調査に続いて斉藤先生と二人で向かい側にある小宝島で地理学的調査のお手伝いをしながら調査手法を習得する機会に恵まれました。隆起サンゴ礁からなる小宝島は周囲わずか約4.7km、面積1km²の小さな島で、当時の人口は22人足らず、宝島小中学校の分校があって小学生はわずか1名、中学生3名だったと記憶しています。夏休みですから、当然、学校は休業中、留守番役の若い男性教員が一人残っていました。

調査は専ら斉藤先生が専門とする水産地理学の視点からの伝統的漁法についての聞き取り調査が主でした。この調査で最も手ほどきを受けたことはインタビューの手法でした。特に、聞き取り調査では録音をせず、インフォーマントの言葉で正確に速記する技術を習得することでした。なぜなら、録音機器に頼るとメモ書きが疎かになり、もう一度録音を聞くこととなり、その分同じだけ時間がかかって無駄が多いことを学び、これが将来の職業にも役立つことになりました。

また、小宝島にも宿泊施設はなく、空き家を一棟借りて宿泊させてもらいました。食事は島民の方をお願いして三食を用意していただき、夜は空き家でランタンによるキャンプのような宵を過ごしました。もちろん、テレビもなく、携帯ラジオから流れてくるNHKラジオの番組だけが唯一の島外からの情報源でした。

ただ、悩ましかったのが前号でお伝えしたトカラハブ対策でした。寝る時になると、先生と私の布団の間に箒を1本置いて、ハブが出たら気付いた方が叩いて撃退するという極めて野蛮な方法だけが頼りでした。「石飛くん、ハブは良く天井の梁を這うので、上にも注意するように！」と言って、極めて暢気にしていらっしゃいましたが、こちらは心配で毎晩なかなか寝付けない夜を過ごしました。これも今では楽しい思い出ですが、南端の「低島」だけにハブが生息するのは分らず仕舞です。



小宝島

十島村公式HPより



湯泊温泉

十島村公式HPより
当時はこんなに立派なコンクリートで囲まれてなく、岩の隙間という感じだった。参考資料:斉藤潤(2024)に当時の写真掲載あり。

石飛 一吉

参考資料

*山崎 義人・後藤 春彦・村上 佳代(1997) 島民生活の体系把握による小宝島の生活環境に関する考察「日本建築学会計画系論文集」500, pp.161-168.

*斉藤 潤(2024)【寄稿】ありし日の島影 48, ガイドと歩きふり返る小宝島の歩み「離島経済新聞社」2024年9月26日(<https://ritoeki.com/voice/32392> 最終閲覧)